

33 小笠山砦の縄張りから見る家康の築城技術の進化についての考察

筆 者 石山 尚哲

はじめに

小笠山は掛川市と袋井市にまたがる最高標高 264.8m の山地である。近年は、ハイキングコースや貴重な動植物が残るエリアとして市内外の多くの人々に親しまれている。標高だけを見ると低山、丘陵とも言える山ではあるが、河床堆積物である小笠山礫層で形成された山塊は、激しい浸食を受けて山内の至る所に断崖絶壁を形作っている。

戦国時代、この地形を利用してこの地に城砦「小笠山砦」を築いた武将がいた。後の天下人、徳川家康である。江戸時代、文化 2 年（1805）に掛川藩で編纂された地誌「掛川誌稿」にもこの砦のことが記録されている。

『笹ヶ峰御殿 小笠権現ノ西ニアリ、東照宮（家康）今川氏真ヲ掛川城ニ攻メ給フ時、及高天神ヲ攻メ給フ時、御本陣ニ成リシ所ナリ、高天神記、天正七年（1579）十月ノ條云、小笠山ノ砦、是ハ先年掛川攻メノ時、御本陣ニ成リシ所也、今ニ於テ笹ヶ峰ノ御殿ト云是成、吉例ニ依テ今度砦ニナサル、武徳編年集成ニ、永禄十一年（1568）十二月廿一日、始テ掛川ヲ攻ラル、御旗山入山瀬ニ立ラル、廿二日相谷ニ屯ヲ設ケ給フトアリ、其所今詳ナラズ』（括弧内は筆者追記）

掛川誌稿によると、永禄 11～12 年（1568～1569）の掛川城攻めと、天正 7～9 年（1579～1581）までの高天神城攻めの際の 2 度にわたって陣城として使用し、家康本人が在陣したことから小笠山砦を「笹ヶ峰ノ御殿」と呼ぶ、とある。現在では、小笠山砦が掛川城攻めと高天神城攻めの際に 2 度使用されたというのが通説となっている。

「砦」という名称は、「城」の小型版、簡易版というイメージを抱くが、小笠山砦はその概念を大きく覆す要素を持っている。小笠山山頂を含めた尾根筋を利用して構築された城郭は、東西 600m、南北 300m に及ぶ巨大な城郭であり、その規模は城と呼んでも差支えないほどのレベルのものである。そして砦の中に立ち入ると、堀切、堅堀、横堀、土塁、馬出等、実に多彩な構築物を伴う技巧的な城砦であることが分かる。高天神城攻めの際に築いた六砦のうち小笠山砦を除く 5 つの砦と比べてみるとその差は歴然である。

家康は、なぜ小笠山の山中にこのような砦を築いたのだろうか。本稿では徳川氏の築城技術の進化の視点から、その疑問について考えてみたい。まずは小笠山砦の全容をもう少し詳しく見てみたい。

第 1 章 小笠山砦の特徴

小笠山砦は、小笠山山頂を含めた Y 字状の細い尾根上に築かれている。尾根筋の両岸は風雨により浸食された断崖となっており、尾根筋以外からの攻城は極めて困難な天然の要害となっている。【資料 1】をご覧くださいながら当時も大手筋であったと思われる小笠神社のあるエリアから、この砦の特徴を見ていきたい。

当時は神社の建物のある空間、曲輪①も城域の中にあったと思われるが、この部分は後世の改変を受けており、どのような構造であったのかは不明である。城郭としての遺構が残るのは、曲輪②からである。曲輪②の北側外縁部には分厚い土塁があり、砦内の通路は土塁の一段下の南側を通して奥に向かっている。攻城兵は曲輪②を突破する際には土塁上に陣取った守備兵からの攻撃に晒されることになる。

曲輪②と③の間は土橋①がある。土橋は尾根筋の通路の両側を削り、通路を狭くすることで攻城兵の進撃を妨げる防御施設である。土橋の両側には堀切が築かれている。堀切は尾根筋に向かって直角方向に設けられた堀のことであり、尾根筋を通行する攻城兵の動きを遮断するために設けられる。土橋と堀切は山城の中ではオーソドックスな施設であり、小笠山砦内には他にもこの組み合わせで設置されている箇所がいくつもある。

土橋①を通過すると、曲輪③に入る。この空間は平坦な地形ではなく、曲輪③の入り口から曲輪④に向かって登り斜面となっており、曲輪と呼んでよいのか迷う構築物である。土橋①を通過した攻城兵はここで尾根上を登坂することになる。この部分は、細尾根が続く砦内の中で例外的に尾根に幅があり、南側から見ると▽の形をしている。この三角形の外縁に沿うように左右にV字状の横堀①が設置されている。廃城から400年を経て堀底に堆積した土砂により堀の深さはそれほどでもなくなっているが、現在でも堀の窪みの連なりを目視で確認することができる。横堀は、曲輪の周囲に沿って設置される堀で、中世の平城や近世城郭においてはよく見られる構造物であるが、山城においては武田氏の城郭で多用されるほかは、設置例はあまり多くない。



曲輪③の先には土橋②がある。この部分も土橋と堀切がセットになっている。土橋②を通過すると曲輪④に入る。この曲輪は、曲輪③とは逆に△の形状をしている。面積としては曲輪③に比べると狭く、もともとは同じ尾根上にあった曲輪③と④を堀切によって分断したものだということが分かる。この曲輪には「笹峰御殿」の解説看板がある。

曲輪④の先は再び土橋③となっていて、土橋の細い通路を通過して曲輪⑤に入る。曲輪⑤には、現在は多聞神社が鎮座している。この曲輪の周囲には分厚い土塁が巡っている。曲輪⑤は、Y字状の縄張の分岐点にあたり、砦の中心部にあたることから、砦の主郭部分であったと思われる。また、この曲輪の南西側の虎口（曲輪の出入口）には馬出状の小曲輪⑥が付随している。「馬出」とは、曲輪の出入口である虎口を守るための構造物である。虎口の出口側を土塁で囲み（土塁の外側に堀を設ける場合もある）守備兵の出入りを安全に行うとともに、攻城兵が直接虎口に取り付けないようにするためのものである。曲輪⑥の西側には二重堀切が設置されており、曲輪⑤の虎口を馬出状の構築物（曲輪⑥）とともに厳重に防備している。

ここから先は、尾根筋が二又に分離するがまずは西側に伸びる尾根を見ていきたい。二重堀切の先に曲輪⑦がある。尾根上の小さな平場という感じで特段、構造物は設けられていない。その先は両側が断崖絶壁の細尾根の上を進むことになる。尾根の幅は人の肩幅程度しかなく、ここを通り抜けるのはかなり危険である。その危険な尾根道を渡ると曲輪⑧にたどり着く。この曲輪は砦の西端の曲輪である。3段ほどの階段状の曲輪となっており、曲輪の西側には横堀②を伴っている。城内への導入路は曲輪の西側下を通過しており、砦の西側から入ってきた攻城兵は曲輪⑧からの射撃を浴びながら砦内に侵入することになる。その先には土橋を伴う堀切①と、土橋の無い堀切②の2条の堀切があり、この2本の堀切が砦の西側の境になるようである。

続いて曲輪⑤から北側の尾根側を見てみたい。こちらも細尾根上の道を小笠山山頂のある曲輪⑨に向けて進むことになる。この尾根筋の西側には横堀③が設置されている。横堀③は曲輪⑦から曲輪⑨までの尾根筋の西側に沿った円弧状のたいへん規模の大きい横堀である。曲輪⑨は特段の遺構は見られない。その先が最後の曲輪⑩である。曲輪⑨と⑩の間の通路の両側には堀切が設置されており、中央部分が土橋⑤となっている。曲輪⑩は2段構造となっている。曲輪⑩の西側には横堀④が曲輪に沿うように設置されている。その中央部分が土橋⑥となっている。曲輪⑩と横堀④の形状は、先に紹介した曲輪③と横堀①の形状とよく似ている。この部分が砦の北西側の入り口にあたると思われる。

以上が小笠山砦の概要である。ご覧いただいたように小笠山砦は、単に規模が大きいだけではなく、曲輪と曲輪の間を土橋と堀切・堅堀で丁寧に遮断した上に、通路に対して一段高い曲輪や土塁上から攻撃ができるような工夫を随所に盛り込むなど、非常に工夫を凝らした技巧的な城郭であることがお分かりいただけるであろう。使用されていた期間が一時的であることから「砦」という名称となっているが「小笠山城」と呼んでもなんら問題ない規模と構造であると言える。徳川家康が築いた城砦を郷土の遺産として、もっとPRしてよいだろうし、城郭研究的にもさらに注目を浴びるべき対象であると言えるだろう。そうした評価は筆者のみならず、多くの城郭研究者が同様の指摘をしている。「(小笠山) 砦は、他の六砦とは比べようもない大規模でその遮断系構造の強化、そして重層的な導入系構造は徳川系の進化した城郭論だけではなく、家康を超える勢力との対比も必要ではないかと思われる。例えば織田系城郭である。」(水野茂) 註① 「小笠山砦はその規模や堀・虎口・馬出等の構造など、他の砦と異なり格段に整備された砦であった。」(望月保弘) 註②

非常に多くの構築物が設けられた小笠山砦であるが、実際に砦内を歩いて一つ一つの構築物を見ていくと、その必然性に疑問を感じる部分がある。次章では、城砦に構築物を設ける意味について考えるとともにその疑問点について言及してみたい。

第2章 小笠山砦の構造と防御戦術

城郭は、防御のための施設である。そのため、堀や土塁、橋、櫓と言った土木構築物は、攻城兵には物理的な障壁となり、さらに弓矢や鉄砲等の火力によって敵の突撃を破碎し、攻勢意図を挫くという目的のために構築される。これらの構築物は、堀や土塁等の個々のパー

ツが個別に機能するだけでなく、それらが有機的に連携することによってその効果を高めている。例えば、単に城の周りに堀を囲んで守るよりも、堀を渡った先に登坂するのが困難な急傾斜の土塁を設置し、さらにその土塁の上に、弓矢や鉄砲での狙撃が可能な櫓を設置することで、堀を降りて、土塁に登るという運動を強制して動きが鈍った敵兵に対して火力を集中させることによって、敵に強大な打撃を与えることができると言ったような具合である。

小笠山砦の最大の防御施設は尾根の両側の切り立った崖であり、攻城兵が尾根上の曲輪に取り付くことのできる場所はきわめて限られている。その限られた場所に敵兵の侵攻を妨害し、敵兵に打撃を与えるための構築物を設けることでさらに敵が侵入しにくい城郭になる。したがって、城の構築物の一つ一つにはその場所にその構築物を設置する目的、意味が存在するはずである。

前章の終わりで疑問点としてあげたのは、小笠山砦の構造物には、それらの構造物の内、なぜこの場所に設置するのかその意味がよく分からない構造物があるということである。

第1章でご覧いただいた縄張図の曲輪③にある横堀①をご覧いただきたい。この横堀は登城ルート上の笹ヶ峰御殿と呼ばれる曲輪の手前にある丘陵状の地形の裾部分にV字型に築かれている。この構築物を設置した目的は何だろうか。尾根筋の両側が高い断崖で、尾根の下から丘陵部分に取りつくことは非常に難しいと思われる。進入路から丘陵両側への迂回攻撃を阻止するためのものかとも思ったが、横堀が迂回を阻止するどころか、誘導路的な役割を果たしている感じすらする。横堀の内側に急傾斜の土塁が構築されていれば堀と土塁をあわせて高低差のある障壁となり得ると思われるが、城内側は緩やかな傾斜であり兵の内部侵入は比較的容易だと思われる。(恐らくは柵や逆茂木、乱杭などの障壁物を設けて侵入を容易にさせない工夫は講じられていたとは思われるが。)

山城での横堀の使用は武田氏の城郭での使用が多く、横堀と土塁とのセットでの構築のパターンが多い。武田氏が築いたと考えられている高天神城(掛川市)【資料2】の西峰に築かれた横堀や、八幡平城(御前崎市)の主郭南東側下に築かれた横堀と比較してみると、城外側の低い土塁とその内側に設けられた堀までは小笠山砦とも共通するのだが、堀の内側に急傾斜の土塁があるかないかが大きな違いとなっている。筆者が小笠山砦の横堀を見た際に、武田氏の山城で見たような既視感と、城内側からの圧迫度がない開放的な感じへの違和感を同時に覚えたことが本稿執筆の発端となっている【資料3】。

次に曲輪⑤に付随した小曲輪⑥をご覧いただきたい。資料等では丸馬出と記載されていることが多い。馬出は虎口の前面に堀と土塁によって構築された小空間のことで、(1)虎口に敵が直接取りつくことを防ぐとともに、(2)逆襲のために兵士が城外に出撃する、逆襲のために出撃した兵士を城外から城内へ収容するための拠点としての2つの機能を有している。そのため、馬出自体の城外への出入口が2ヶ所設けられるのが一般的である。ところが小笠山砦のこの馬出状の構造物には馬出からの出入口は一ヶ所しかなく、馬出が本来持つ2つの機能を十分に果たせるか疑問が残る。この構造物を外柵形虎口と解釈することも可能であるかもしれないが、この構造物西側の円弧状の形状から見るに、築城者は丸馬出を意識した造作をしたのではないと思われる。武田氏が多用した丸馬出の形状を模した構造物を作ったものの、南東側は尾根端の断崖に阻まれ出入口を作ることができず、北西側のみしか設ける

ことができなかったのではないかと考える。

上記に見るように、家康はなぜ効果に疑問が残る構築物を築いたのだろうか。次章では、その疑問点を考えるために、徳川氏の築城技術について考えてみたい。

第3章 徳川氏の築城術の変遷と小笠山砦

戦国大名が築いた城砦には、その勢力ごとに共通した特徴が見られることがある。例えば、北条系の城郭に見られる角馬出、武田系の城郭に見られる丸馬出や横堀、織豊系城郭に多く見られる枡形虎口や矩形の曲輪構造等はその特徴であろう。同じ戦国大名が同じような構造の城郭を構築するのは、家臣団が自勢力内のどの城郭を守備する場合であっても、同じ戦術で戦うことができ、城ごとに防御戦術をその都度習得する必要がないという利点がある。戦国時代は在番制と言って、領国内の国衆たちを一定期間ごとに交代制で守備させることが一般的であったことから、領国内の城を同じような構造で築くことによって、国衆がどこの城でも戦闘力を発揮しやすい環境を構築するためだと考えられる。

では、徳川氏における独自の築城術は存在するのであろうか。天正期以前の徳川氏によって築かれた城砦の縄張を見てみよう。徳川氏が構築した可能性が高い城砦、天正期以降に改修が行われていない可能性が高い城砦と比較してみたい。

比較対象とするのは市内にあった杉谷城【資料4】としたい。この城は、家康の掛川城攻めの際に築かれた陣城で、それ以降は活用されておらず永禄期の徳川氏の城郭の特徴を残していると考えられている。城自体は区画整理事業によって消滅してしまったが、事業施行に先立って発掘調査が行われており、その構造も比較的よく分かっている。縄張図を見ると、堅堀や比較的規模の大きな堀切は見られるものの、虎口を守る馬出のような構造物や、曲輪の周囲を防御する横堀のような構造物も見られず、小笠山砦と比較すると単純な構造の城郭であることが分かる。また、前述したとおり、小笠山砦と同時期に構築された高天神城の六砦の小笠山砦以外の五つと比較しても、小笠山砦の技巧性の高さは他の砦を抜きでている。これは、小笠山砦がこれまで徳川軍が持っていなかった築城技術によって造られた城であることを示している。

この築城技術の変化はどこからもたらされたのだろうか、徳川軍の内的な要因（独自に開発した）というよりは、外的な要因、端的に言えば、他の戦国大名の築城技術を吸収して変化していったと考えるのが自然であろう。他の戦国大名とはどの大名かと考えた時に、可能性としては同盟国である織田氏、征服した遠江の旧領主である今川氏、遠江・三河で激しい戦いを繰り広げた武田氏が候補になろう。それぞれの築城技術を比較すると、丸馬出や山城で横堀を多用した武田氏に源流を求めることが妥当であり、多くの研究者が同様の指摘をしている。「遠江における武田氏との攻防と城郭接收のなかで、防御性の高い横堀や二重堀切などの新技術を取り込み、改良と規模の拡大を重ねていった徳川築城術の一端が垣間見える。」（戸塚和美）註③ 事実、徳川氏は天正3年（1575）以降、武田氏の二俣城（浜松市）、犬居城（浜松市）、諏訪原城（島田市）等の城を次々に奪取しており、徳川軍は、武田軍との戦いの中で、武田氏が構築した城砦を接收することでその築城技術を手に入れたと考える

のが最も妥当であろう。

まとめとして

家康が小笠山砦に技巧的な縄張を施した理由として、高田氏は「徳川方の陣城というよりも上位権力の（※例えば織田信長の御座所）として築かれた状況も考えておくべきかもしれない」（高田徹）註④ と述べている。しかしながら、仮に信長の御座所として厳重な設営するのであれば、織田氏の築城技術や徳川氏の従前までの築城技術によって行うのが自然と考えるが、小笠山砦の縄張りは織田氏のそれとは類似性が乏しく、むしろ敵方であった武田氏に類似性が見出せるのは前述したとおりである。

なぜ家康が小笠山砦をこのような技巧的な縄張りとしたのかを考えた最終的な結論は、高天神城攻防以降の徳川氏の城づくりを見ると見出せるのではないだろうか。家康の土の城づくりは高天神城の戦い以降も続けられる。本能寺の変後、武田氏の旧領である甲斐、信濃に攻め込み、北条氏、上杉氏と抗争を繰り返す中で多くの城砦を整備している。（多くは武田氏の築いた城砦を徳川氏が再利用していることから、現在残る遺構が武田氏の築城によるものか、徳川氏の改修によるものかが判然とせず、この問題の解決を難しくしている。）また、秀吉との戦いの中では、三河から遠江、駿河に至る諸城を羽柴軍との戦闘に備えて改修、強化したと考えられ、この際に最新の技術を取り込んだ改修が行われたと考えられている。その中で、今回取り上げた「横堀」を取り入れた城郭が三河や尾張と言った地域で見ることができる。小牧・長久手の合戦の際に家康が本営を置いた小牧山城【資料5】には、山腹と山麓の2箇所にもその際に構築された長大な横堀が残されている。

しかしながら、この時期に家康の築いた城郭には、武田氏や北条氏、あるいは織豊系の城郭に見られるような規則的な特徴は見出すことはできない。それが明確に現れるのは、関ヶ原の合戦後の天下普請による築城の中で藤堂高虎が縄張を行うようになって以降のことである。一つには、このころは既存の城郭の改修がほとんどであり、自由にパーツを縄張りに組み込むことが困難だったということが理由として考えられるかもしれない。が、辺境の城砦に異なる地域から動員された国衆を、どこの城砦でも同じような防御施設による、同じ戦術で戦うことができる効率性の良さを求めていなかったのかもしれない。その必要性は関ヶ原の合戦後に多くの外様大名を従えて、戦うことを想定した城づくりの段階で、はじめて現れたということだろうか。

関ヶ原以前の徳川氏の築城術を俯瞰する限り小笠山砦は異端の存在と言ってよいのだろう。そう考えると家康が小笠山砦でやりたかったことは、単に防備の厳重な城砦を構築することだけではなく、武田氏の城砦を接収して手に入れた築城術を実際の城づくりの中で試すことではなかったのではないだろうか。新兵器の採用にあたって何度も試験を繰り返すのと同様に、武田流の築城術を実際の城砦の中に築き、恐らくは演習的なものを行う中でその有効性を確認したかったのではないかと思われる。家康がその目で確認したかったからこそ、最前線の城砦ではなく、自らの本営を試験場としたのではないだろうか。

小笠山砦は細い尾根上に築かれた砦であるため、平場の面積が限られている。したがっ

て防御パーツを縄張の中に取り込む際に、最善の位置に築くことができなかったことが、横堀①や曲輪⑥の設置位置や形状の不自然さに繋がっているのではないかと推測する。

こうして試験を行った結果、横堀のように有用性が認められた施設については、この後の築城に反映されていくものの、それは他の戦国大名の城づくりと比較すれば控えめな導入に留まったと言える。そういう意味では、小笠山砦はまさしく試みの砦だったと言える。

いずれにしても、小笠山砦には徳川氏の手しか入っておらず、またその後の改変も受けていないことから、天正9年当時における同氏の築城技術を見ることが可能であり、筆者はその中から家康の城づくりに対する変化の兆しを垣間見ることができるのではないかと考えた。

私たちは、後の天下人家康が城づくりを試行錯誤し、悩みながら、天下取りの覇道を進んでいったこと、その貴重な足跡が遺構として市内に残されていることを広く周知、共有できるようにすることが必要ではないだろうか。来年は大河ドラマ「どうする家康」で家康と家康に関連した事績が大きくクローズアップされる一年となるであろう。様々な媒体を駆使して小笠山砦についても市の内外にその存在と価値が認知されるようになることを願ってやまない。

最後に

最後に、本テーマで論文をまとめようと考えたのは筆者の職場の上司であり、城郭研究の師でもある戸塚和美氏との談笑の中で意見が一致した小笠山砦の縄張りについての違和感が発端であり、このテーマで本稿の執筆を快くお許しいただいた戸塚氏に本稿の末尾を借りて感謝の意を表したい。

引用・参考資料等

註① 静岡県の城跡 中世城郭縄張図集成（西部・遠江国版）120 ページ 下段 22 行～25 行

註② 中世城郭研究 300 ページ 下段 20 行～21 行

註③ 静岡県の歩ける城 70 選 171 ページ 上段 22 行～下段 4 行 掛川市立図書館所蔵

註④ 中世城郭研究 第 36 号 32 ページ 上段 8 行～10 行

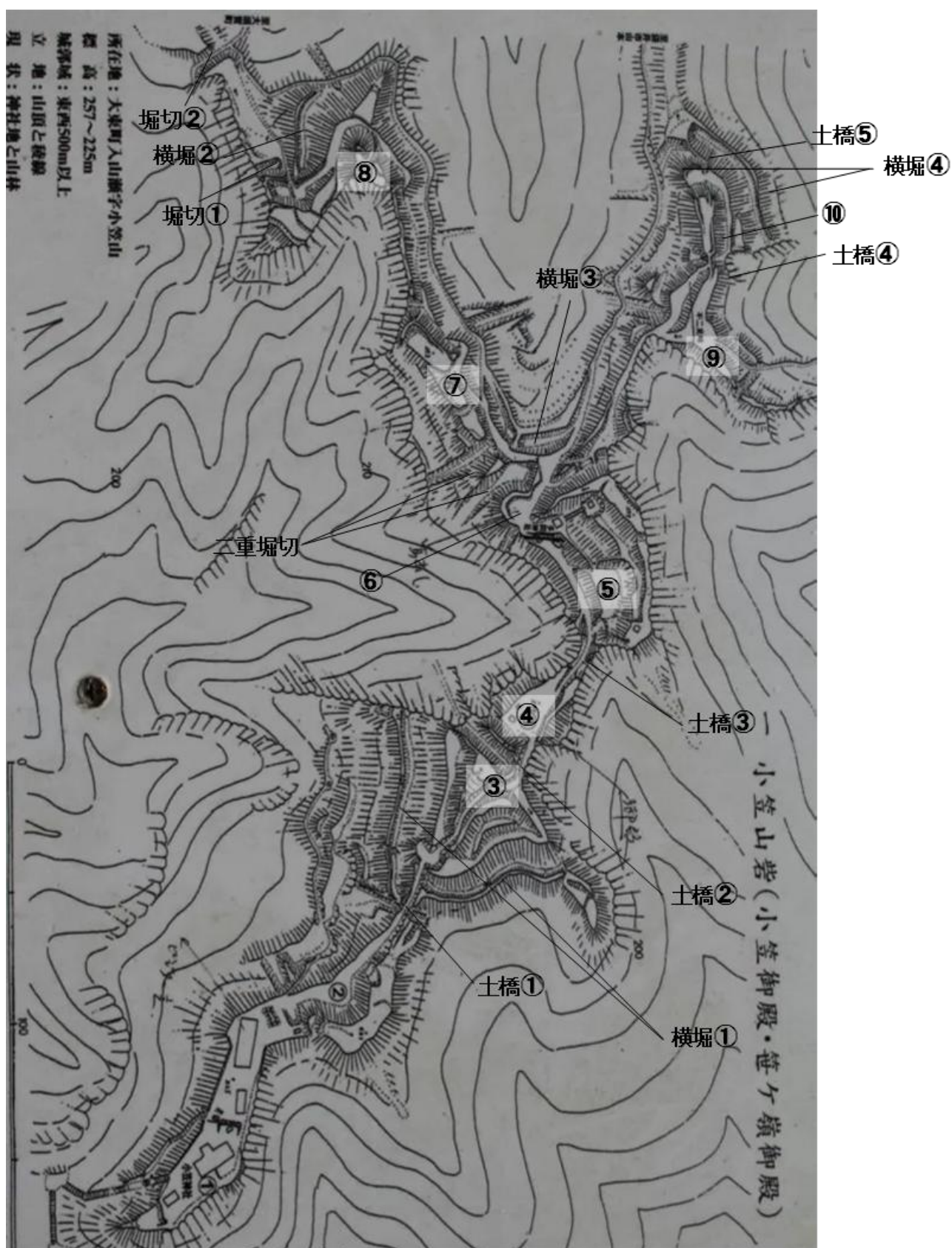
註⑤ 小笠山砦案内看板

註⑥ 東海の名城を歩く静岡編 118 ページ 掛川市立図書館所蔵

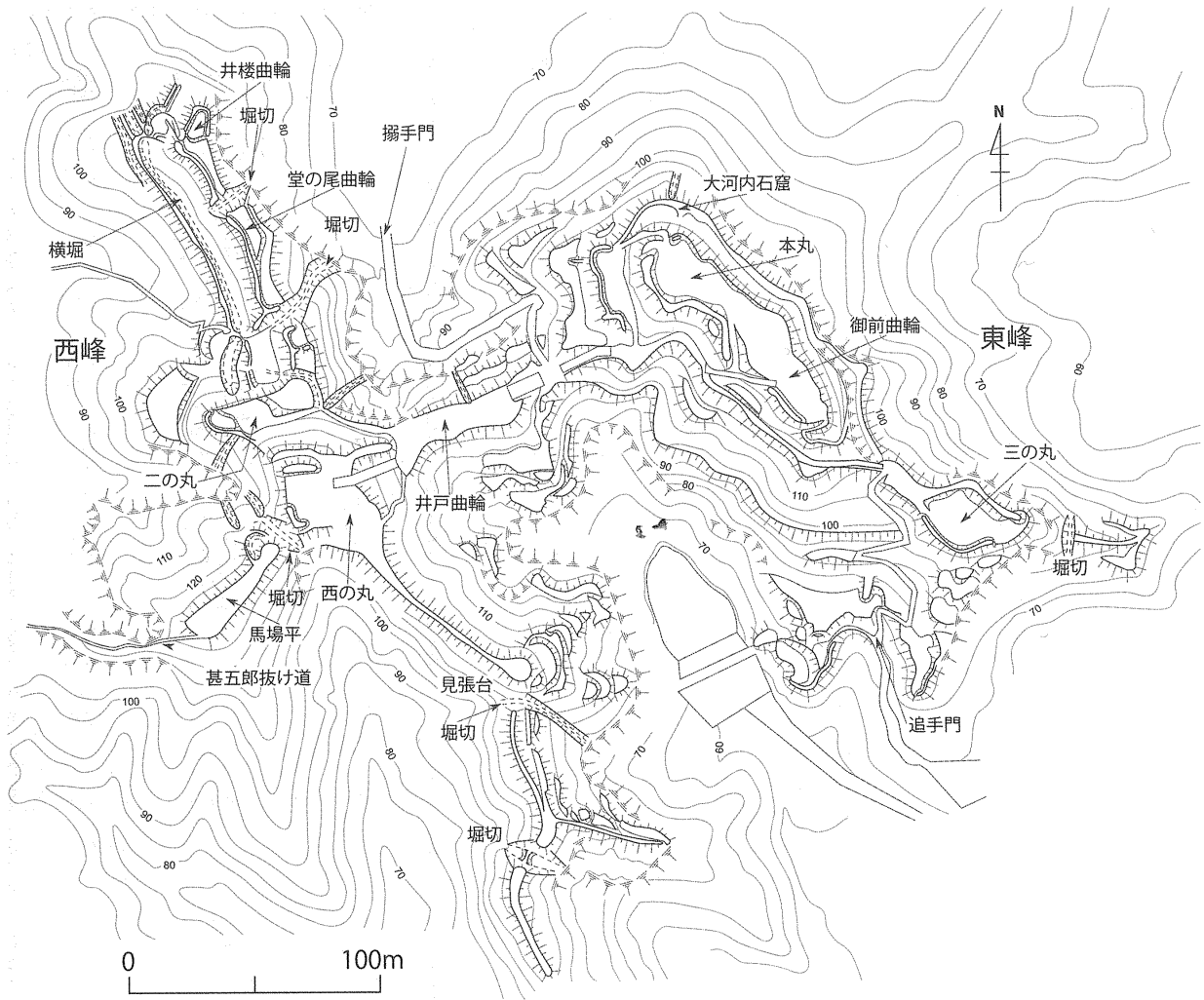
註⑦ 東名掛川 I・C 周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 掛川市立図書館蔵

註⑧ 愛知の山城ベスト 50 を歩く 21 ページ 掛川市立図書館蔵（中央館・大東館）

【資料1】小笠山砦縄張図 ※註⑤（構築物の番号等は筆者が一部加筆修正した。）

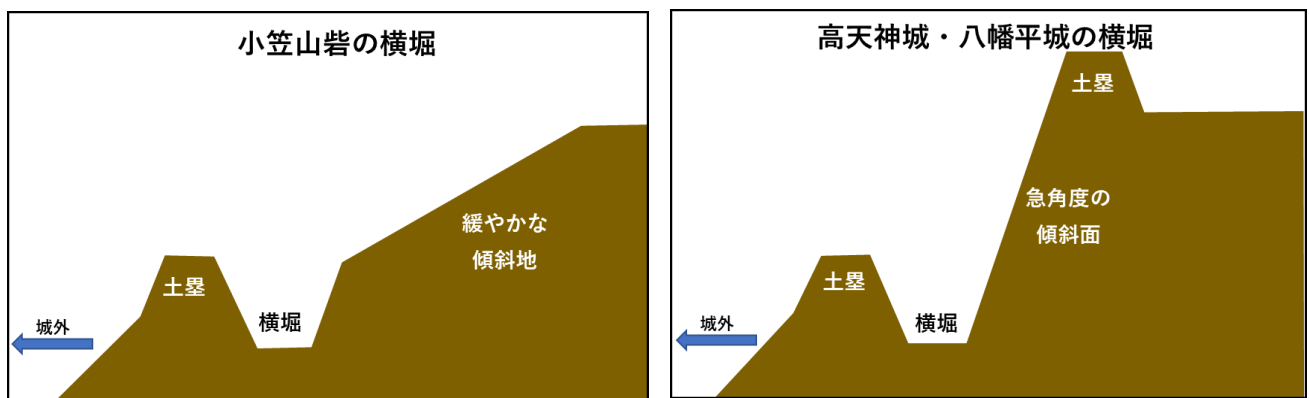


【資料2】高天神城縄張図 ※註⑥

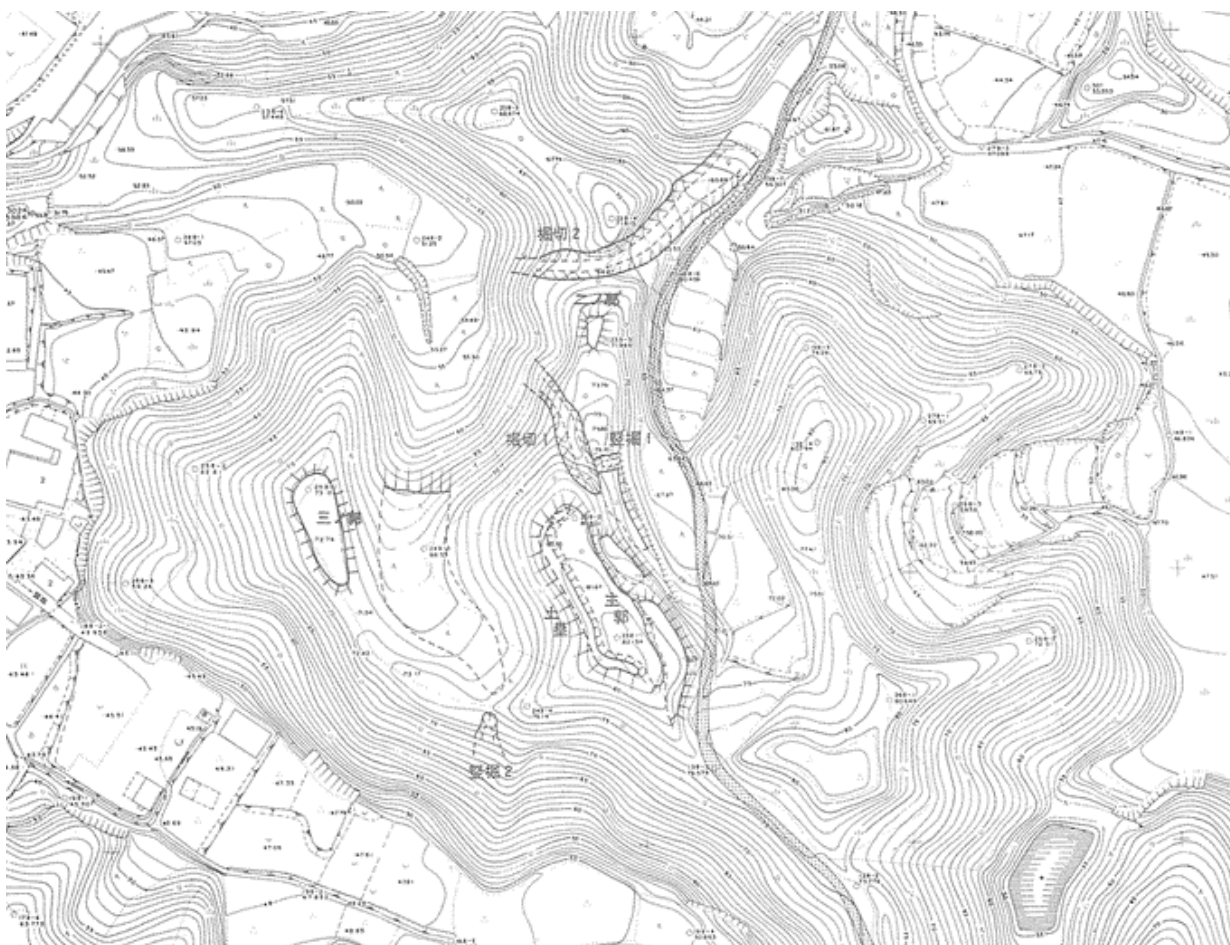


●—高天神城縄張図（『史跡高天神城基本整備計画策定報告書』を改変）

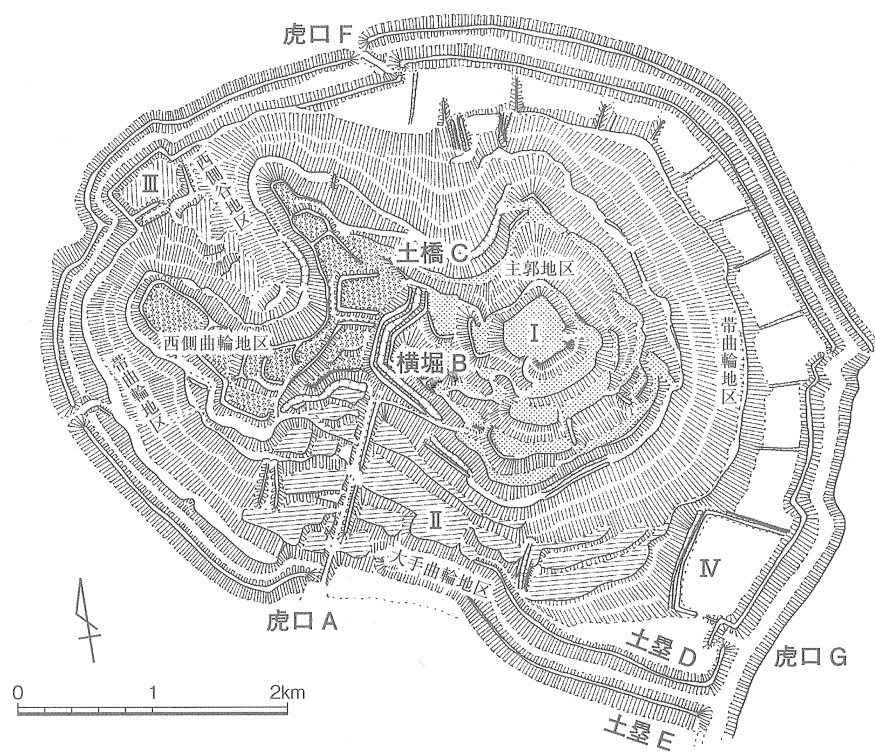
【資料3】小笠山砦と武田氏築城の城郭の横堀の構造の違い（筆者作成）



【資料4】杉谷城縄張図 註⑦



【資料5】小牧山城縄張図 ※註⑧



小牧山城縄張図 (作図：中嶋 隆)